

研究発表 1

汝自身を知れ

『パルチヴァール』にみる自己認識と神認識

森下勇矢（東京大学大学院）

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ（Wolfram von Eschenbach, um 1160 - um 1220）の『パルチヴァール』（Parzival, um 1200）では、愚かな主人公パルチヴァールが騎士の教えを受けて成長していき、最終的に聖杯城の主になるまでが描かれる。

老騎士グルネマンツのもとで騎士の作法を学び、一人前の騎士になったパルチヴァールは、意図せず足を踏み入れた聖杯城にて、彼は傷の苦痛に苦しむ城主アンフォルトスに会うも、グルネマンツの「むやみに尋ねてはならない」という戒めを守ったがために、その苦しみの原因を尋ねることを控える。これによって名誉を失い、パルチヴァールは悲嘆のあまり神に憎しみを抱くのであるが、この一連の流れはパルチヴァールに自己や神に関する正しい認識が欠落していることによって生じる。本発表ではパルチヴァールの「自己認識 Selbsterkenntnis」ならびに「神認識 Gotteserkenntnis」の様相を明らかにするとともに、これらの認識がパルチヴァールによって行われる贖罪行為や、彼が聖杯王になるプロセスといかに関わるかを論じる。

研究発表 2

後期中世の北ヨークシャーにおける聖地とアーサー王伝説

—十字軍戦術書*Li charboclois d'armes du conquest precious de la Terre saint de promission* (1330頃)におけるアーサー王伝説とLincoln Thornton写本のアーサー王ロマンスにおける聖地の表象—

杉山ゆき (東京都立大学)

本発表では北ヨークシャーはRyedaleの教区教会Stanegrave Minsterに眠るふたりの人物, Roger de Stanegrave (没1332頃)とRobert Thornton (1397頃-1465頃) が遺したテキストを取り上げ, 後期中世北イングランドにおける聖地とアーサー王伝説の関わりについて考察する。Stanegraveは聖地での従軍・エジプトでの30年以上の捕虜生活の経験をもとに十字軍戦術書*Li charboclois d'armes du conquest precious de la Terre saint de promission* (以下*Charboclois*)を執筆し, エドワード3世に献呈した聖ヨハネ騎士団員である一方, Thorntonは『頭韻アーサー王の死』の唯一の現存写本Lincoln Cathedral Library, MS 91 (以下Lincoln Thornton写本)を残したことで知られるジェントルマンである。本発表は, *Charboclois*における「6人の王の予言」(『ブルート年代記』にしばしば挿入されたマーリンによる政治的予言)とアーサー王・ランスロットへの言及を考察し, その後Lincoln Thornton写本における3つのロマンス, 『ガレスのサー・ペルシヴェル』・『サー・デグルヴァン』・『頭韻アーサー王の死』における聖地や十字軍への言及に焦点を当てる。そして, 後期中世イングランドの聖地への複雑な眼差しがアーサーや円卓の騎士のナラティヴに反映されている様子を明らかにし, アーサー王伝説の地理的限界についても考察する。

研究発表 3

中高ドイツ語の叙事詩における婦人の欲動の抑圧について

渡邊徳明（日本大学）

ハルトマン・フォン・アウエの『エーレク』では、主人公が妻エーニーテを連れ旅に出る。旅の途上、妻は話すことを禁じられるが、夫を危機から救うために禁を破り罰を受ける。このように 1200 年前後のドイツの宮廷叙事詩には、貴婦人が男性から虐待を受ける場面も少なくない。その理由として、そもそも騎士・武人たる男性の失敗や危機が、突き詰めると婦人の、あるいは婦人への愛（さらには性的欲動）に帰せられるからである。中世において誘惑的な婦人のイメージは、楽園追放を招いたエファ（イヴ）と重なるのが常で、叙事詩に描かれる貞淑な貴婦人までも、しばしばそのような側面が付与される。とはいえその場合も、表面的には欲動を自ら抑圧し愛を拒絶したり、（本来）愛する人までも虐げようとする。更には内面に隠された欲動が「思わぬ」結果を招来することもある。これらの描写を従来のキリスト教伝統の関連を踏まえ、更には精神分析的な視点で解釈する。

研究発表 4

『セギュランまたはドラゴンの騎士』における「幻覚の戦略」

渡邊浩司（中央大学）

『セギュランまたはドラゴンの騎士』とは、独立した長編作品ではなく、13 世紀から 15 世紀にかけて筋書きが徐々に出来上がったと想定されるテキスト群のことであり、校訂本がエマニュエル・アリオリ氏によって 2019 年に刊行されている。

『セギュラン』の最古のバージョン（「主要バージョン」）は、『メルランの予言』を収録するパリ・アルスナル図書館 5229 番写本から復元されたものである。39 のエピソードからなるこのバージョンによると、セギュランはランスロやトリスタンに優る活躍を見せながらも、妖精モルガースが魔法で現出させたドラゴンを追跡して姿を消してしまう。

「主要バージョン」以降に生まれた続編や改作ではドラゴン追跡の話が受け継がれているものの、最終的にはドラゴンの性質が大きく変わっている。本発表では、アリオリ氏が「幻覚の戦略」と呼ぶ語り的手法に注目しながら、『セギュラン』の独創性に迫りたい。

研究発表 5

Sir Tristrem と 14 世紀イングランドにおけるトリスタン物語の受容

松田隆美（慶應義塾大学）

Sir Tristrem はトリスタン物語を単体で扱った中英語による唯一の作品で、14 世紀前半に制作された Auchinleck 写本に複数の脚韻ロマンスとともに収録されている。トマに基づく翻案だが、ベディエによって、凝りすぎた文体による縮約版でトマの原典を何一つ残していないと酷評されたためか、英語圏においても比較的研究が少ない。本発表では *Sir Tristrem* を、写本における文脈と中英語文学におけるトリスタン物語の受容という 2 つの視点から分析し、このロマンス作品の個性を明らかにする。*Sir Tristrem* には、イングランド北部の読者層をもつ Auchinleck 写本の性格を反映して、トリスタン物語をイングランドとアイルランドの政治地理的な文脈で語り直す意図が読み取れる。14 世紀イングランドにおけるトリスタンへの言及は決して多くはないが、そこからは滑稽なほどに一途な恋人というトリスタン像が浮かび上がってくる。*Sir Tristrem* は、いわゆるケルト文化圏ではなく、ブリテン諸島を中心とした地理世界で展開される、ときに喜劇的な恋と冒険のナラティブとして翻案されたと考えられる。